

金錢の話

太宰治

青空文庫

宵越しの金は持たぬなどといふ例の江戸つ子氣質は、いまは國家のためにもゆゆしき罪惡で、なんとかして二、三千圓も貯金してお國の役に立ちたいと思ふものの、どういふわけがお金が残らぬ。むかしの藝術家たちには、とかく貯金をいやしむ風習があつて、赤貧洗ふが如き状態を以て潔しとしてゐた様子であつたが、いまはそのやうな特殊の生活態度などはゆるされぬ。一億國民ひとしく貯蓄にいそしまなければならぬ重大な時期であると、嚴肅に我が身に教へてゐるのだが、どういふわけか、お金が残らぬ。私には貧乏を誇るなんて厭味な、ひねくれた氣持はない。どうかして、たつぷりとお金を残したいものだと、いつも思つてゐる。恆産があれば恆心を生ずるといふ諺をも信じてゐる。貧乏人根性といふものは、決していいものではない。貯金のたくさんある人には、やつぱりどこか犯しがたい雅操がある。個人の品位を保つ上にも貯金は不可缺のものであるのに、更にこのたびの大戦の完勝のために喫緊のものであるのだから、しやれや冗談でなく、この際さらに一段と眞劍に貯蓄の工夫をこらすべきである。少し辯解めくけれども、私の職業は貯蓄にくぶん不適當なのではあるまいか、とも思はれる。はひる時には、年に一度か二度、五百圓、千圓とまとまつてはひるのだが、それを郵便局あるひは銀行にあづけて、ほつと一息

ついで、次の仕事の準備などをしてゐる間に、もう貯金がきれいに無くなつてゐる、いつのまにやら、無くなつてゐるのである。こまかい事は言ひたくないが、私の生活などは東京でも下層に屬する生活だと思つてゐる。文字どほりの、あばらやに住んでゐる。三鷹の薄汚い酒の店で、生葡萄酒なんかを飲んで文學を談ずるくらゐが、唯一の道樂で、ほかには、大きなむだ使ひなどをした覚えはない。學生時代には、ばかな浪費をした事もあるが、いまの家庭を營むやうになつて以來は、私はむしろ吝嗇になつた。けれども、どうもお金が残らぬ。或ひは、私は、貧乏性といふやつなのかも知れない。一文惜しみの百失ひといふやつである。一生お金の苦勞からのがれられぬ宿業を負つて生れて來たのかも知れない。私の耳朵は、あまり大きくない。けれども、それだからとて、あきらめてはいけない。お國のためにも、なんとかして工夫をこらすべき時である。結局、私は、下手なのである、やりくりが上手でないのであらう。再思三省すべきであらう。

私は西鶴の「日本永代藏」や、「胸算用」を更に熟讀玩味する事に依つて、貯蓄の妙訣を體得しようと思ひ立つた。西鶴は、いろいろと私に教へる。

「人の家でありたきは、梅櫻松楓、それよりは金銀米錢ぞかし、庭山にまさりて庭藏の眺め、」と書いてある。全く賛成である。さうして西鶴は、さまざまな貯蓄の名人の逸事を

報告してゐるのである。

「この男一生のうち草履の鼻緒を踏み切らず、釘のかしらに袖をかけて破らず、よろづに氣を付けて其の身一代に二千貫しこためて、行年八十八歳、」で大往生した大長者の話や、または、「腹のへるを用心して、火事の見舞ひにも早く歩まぬ」若旦那の事や、または、

「町並に出る葬禮には、是非なく鳥部山におくりて、人より跡に歸りさまに、六波羅の野邊にて奴僕でつちもろとも苦參たうやくを引いて、これを陰干にして腹薬になるぞと、ただは通らず、

けつまづく所でひうちいし燧石ひうちいしを拾いて袂に入れける、朝夕の煙を立つる世帯持は、よろづ此様に氣を付けずしてはあるべからず、此の男、生れ付いて慳しほきにあらず、萬事の取りまはし

人の鑑にもなりぬべきねがひ、（中略）よし垣に自然と朝顔の生へかかりしを、同じ眺め

には、はかなき物とて刀豆なたまめに植ゑかへける。娘おとなしく成りて、やがて嫁入屏風を拵

へとらせけるに、洛中づくしを見たらば見ぬ所を歩行ありきたがるべし、源氏伊勢物語は心のい

たづらになりぬべき物なりと、多田の銀山かなやま出盛りし有様書せける」などの殊勝な心掛け

の分限者の事やら、「ぬり下駄片足なるを水風呂の下へ焼く時つくづくむかしを思出し、

まことに此の木履は、われ十八の時この家に嫁入せし時、雑長持に入れて来て、それから

雨にも雪にもはきて、齒のちびたるばかり五十三年になりぬ、われ一代は一足にて埒を明

けんと思ひしに、惜しや片足は野良犬めに喰^くへられ、はしたになりて是非もなく、けふ煙になす事よと四五度も繰りごとを言ひて、「やがて、はらはらと涙を流す隠居の婆様の事など、あきれるばかり事こまかに報告してゐるのである。すべて、仰望して以て手本となすべき人たちの行跡である。

私は熟讀して、それから立つて臺所へ行き、何かむだは無いかと、むづかしき顔をして四方を見　せども、足らぬものはあつても、むだのやうなものは一つも發見できなかつた。

一億國民、いまはこの西鶴の物語の中にある大長者たちの如く、こまかき心使ひして生活をしてゐるのである。私の家の狭い庭に於いても、今はかぼちやの花盛りである。薔薇の花よりも見ごたへがあるやうにも思はれる。たうもろこしの葉が、風にさやさやと騒ぐのも、ながなか優雅なものである。生垣には隠元豆の蔓がからみついてゐる。けれども、どうしてだか、私には金が残らぬ。

どこかに手落ちがあるのだ。或る先輩が、いつか、かうおつしやつた事がある。

「自分の収入を忘れてゐるやうな人でなくちやお金が残らぬ。」

してみると、金銭に淡泊な人に、かへつてたくさんお金がたまるものかも知れない。いっもお金にこだはつて、けちけちしてゐる人にはかへつてお金が残らぬものらしい。

純粹に文章を創る事だけを楽しみ、稿料をもらふ事なんぞで考へてゐないやうな文人にだけ、たくさんの貯金が出来るものかも知れない。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集¹⁾」筑摩書房

1999（平成11）年3月25日初版第1刷発行

初出：「雑誌日本」

1943（昭和18）年10月1日発行

入力：小林繁雄

校正：阿部哲也

2011年10月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金銭の話

太宰治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>